

青い海を取り戻し、いこいの場へ

田子の浦港は富士市誕生の昭和四十一年、国際貿易港となりました。以来二十年、工業都市富士市発展の土台となつてきましたが、その歴史はヘドロ問題などで大きな波がありました。そして今、新しい取り組みも始まっています。

富士山を水面にいだく

田子の浦港は、古くは「吉原湊」と呼ばれていました。雄大な富士山を水面に映し、昔から多くの人々が歌や詩にうたったところですが、中でも万葉の歌人山部赤人が、「田子の浦ゆ…」と詠んだのは、あまりにも有名です。

鎌倉時代から東海道のかなめと



活気あふれる田子の浦港

して栄え、江戸時代には国内各地との交易でにぎわう要所でした。



港をピンチにしたヘドロ(昭和45年)

工業港に变身

風光明媚な吉原湊が現在の田子の浦港として変身し始めたのは、昭和三十三年でした。港は沼川と潤井川の合流点を人工的に掘り込んでつくられていきました。

工事は大きな波が来るため、非常に難しく、完成には十余年の歳月と百三十億円を要しました。

昭和三十六年八月、田子の浦港は開港し、四十一年四月には、「国際貿易港」となりました。今では年間約七千隻が出入りしています。

港に入る主な物は、セメント・石油・チップ・トウモロコシなど、積み出す物は、紙製品・砂利・肥料・製紙機械などです。

こうして、田子の浦港は、工業都市富士市の成長の土台となつていきました。

ヘドロピンチに

しかし、工業の発展とともに、田子の浦港は大変なピンチを迎えま

田子の浦港を一度と

汚しちやいけない

村瀬清一さん(鮫島漁師)



した。

工場排水等からヘドロがたまり、港の機能低下を招いたので。その上、ヘドロは硫化水素ガスを発生し、住民の健康と生活環境まで脅かすようになったのです。

そこで、昭和四十六年四月から船にヘドロをくみ上げて、富士川の河川敷に運び処理を始めました。このヘドロの上でできたのが富士川緑地公園です。昭和五十五年には、公害物質は一掃され、港の

漁師をしていて一番つらかったときは、ヘドロで海が汚れたときだね。とれた魚まで臭くて困ったよ。

最近、水が随分きれいになってきたけど、魚のとれる量も種類も昔の半分以下かな。港のできる前は、地びき網でマグロやカツオまでとれたこともあったからね。まあ、とにかく田子の浦港を二度と汚しちやいけないよ。

環境は改善されました。

将来はいこいの場へ

現在は、田子の浦港が市民の皆さんのいこいの場となるような計画を進めています。

本年四月には、山部赤人の歌碑がカーフェリー発着場近くに建てられました。

また、港の東側(元吉原側)には富士山を望める展望台などのある公園の整備が予定されています。田子の浦港は将来、工業港から市民のいこいの場も備えた港にイメージチェンジすることでしょう。

こちら編集室

「二十周年特集号の企画、困ったなあ」と、年度初めから困り出し困るに困って半年間。鬼のような編集長は「困るといふより二十周年号を担当できるなんていい記念じゃないか」とのお言葉。「物は考えよう」とはまさにこのこと。さて、できればのほどは?



カーフェリー乗り場にできた富士山歌碑